慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	西ドイツ文學活動の展望
Sub Title	Outlook on the West German literary activities
Author	田中, 次郎(Tanaka, Jiro)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1953
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.2, (1953. 2) ,p.119- 159
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00020001-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西ドイツ文學活動の展望

田中次郎

まえがき

この調査は本來、東西兩ドイツの全域に亙つて行われている文學活動の狀況を明かにする目的で初められ、資料の蒐集もその線に添つてなされたのであるが、東ドイツの書物が意の如くには手に入らず、最近になり、ポツポツ入るようになつたが、それも纏つた資料となる程度にいたつていない。それが本稿を一應西ドイツの調査に限つた第一の理由である。

この大きな外的制約に加えて、調査の對象自體の本質の問題がある。

一體、ドイツ全域に亙る文學活動というような精神活動があるかどうか、ということである。東ドイツと西ドイツの文化交流は、全然阻遏されている譯ではなく、兩者間の許可制の下に細々とではあるが行われている(註二)。事實上の個人的交通も非合法・合法のいろいろな形で僅かながら行われているのも人の知る(註三)通りである。しかし、東西ドイツが一つの精神現象をなしているか、と言えば、その返答は否定的ならざるを得ない。ナチス統治の時代にドイツの急進的な、或は反政府的、平和的な分子の大半は國外に逃れてしまい、殊に、マルクス主義者のほとんど大部分はいろいろな經路を通つて、(中には自由主義の國に住みついたものも稀にはあるが)、現在では、東ドイツかまたはソ聯内に住んでいる。ドイツ語という共通な傳達手段は使うがこの兩者の文學活動は明かに隔絶されている、ことを認めなければならない。ナチスの出現ということが、現在の二分の狀態の原因たることはいうまでもない。

右のような狀態が、この研究が「西ドイツ」に對象を、限定している第二の理由である。

本稿は、入手できた書物の檢討という範圍を越えることができない。そしてその範圍から得た結論を、先きに言うと、西ドイツの文學活動は、右に述べたような史的現實を、實に驚ろくほど鮮明に反映している、という一語に盡きる。

西ドイツで行われている文學は、一と口に言うと、「運命」という問題を中軸として回轉している精神の運動であり、極めて內省的かつ哲學的な方向をとつてをり、所謂、社會的・實踐的傾向は稀薄である。こうした內觀とも言える大局的な方向に於いて、或ものは一切の過去の道德的規範にわずらわされない實踐を、或ものはその置かれた狀況に對するさまざまな反抗を、或ものは魂の安靜を——その指向されている安靜の驚ろくべき多樣性！——　また或ものは何をおくとも自己の置かれた狀況そのものの苛責ない眞を、というように實に多岐に亙る要求の衝迫によつて動かされている。つまり、歷史を通じてなされた體驗の再咀嚼という一種の袋小路と、これを倫理的實踐によつて超克しようという緊張の上に動いている精神現象といえる。それは事態の本質からしてもいわれねばならないが、文學ばかりでなく、思想とかその他の藝術分野、要するに西ドイツの精神現象全體とも比較調査さるべき性質をもつている。ここには簡單にしか觸れ得ないが、ドイツの今日の實存哲學の思想といふものの影響が非常に强く作用していること、逆にまたこれから脫しようという强い努力のあることも見逃し得ないし、また宗教的な世界觀や信念が實に深く敗戰後の精神活動に根を下ろしていることも驚ろくほどである。これらの信仰は、作家によつて非常な差異を示し、宗教自體の危機、或は教會の權威に對する一般的動搖などを想像せしめる。

さて、それら資料全體から受ける印象は、あまりにも烈しく內省的であり、歷史の巨大な重壓を支え切れないでいる人の姿を聯想させられる——この點は逆に言えば、他に比類なく自己の歷史を尊び、歷史性に忠實な傾向を示すものではあるが——實にそのことによつて、自己の運命の鎖縛にあえいでいる。二度の戰禍の傷はなお生ま生ましく、到底癒着の狀態にあるとは言えない現狀のようである。そして、その中で新たなるものへの胎動は感じられる。ドイツで動いている精神は、物事を、南國風に明るく、輕く淺はかには、とることができないのであろう。

右の大局觀から、本稿は次の三章に分けられる。

一、史的現實に對する態度
　無　心――離　叛
　關　心――抵抗・隨順
二、運命の成立
　決定論――攝　理
三、現實の再批判

右の三つの段階は、一つの現實の精神現象（文學活動）の違つた側面であるが一個の循環運動であつて、それぞれの段階には他の段階が含まれている、その配列は、一見、因果的な系列をなすかの如くであるが、それは現象自體の解明の手段に外ならない。これらの區分・配列によつて、或る一個の全體的な創造活動の本質を明かにしたいと願うのである。

章節がそのように構成されているから、或る章で扱われた作品は、當然他の章でも引用されねばならぬはずであり、同じことが他の全部の章節に言われ得る。

本稿にヘッセやマンや、カロッサの作品が何故扱われていないかの問題に答えなければならない。外國に住む前二者の作品と、現在の西ドイツ文學活動との間に繫がりの存在(註三)するのは誰も疑わないであろう。その繫がり（交流）の有無が問題ではなくて、彼ら巨匠たちの作品がドイツの史的現實に對してもつ關心の眞實性や深さや淺さ如何が問題であり、そうした調査が、一つのテーマであり、ここでは怠られているのである。本稿では、しかしこれらの巨匠と目された人たちの作品の檢討よりは、新しい作家のもの、衆知の作家でもきわ立つた發展の跡を示しているもの、西ドイツで問題になつた作品、等の點檢の方がより重大視されている。そのことは、本稿が、西ドイツの文學活動を、全體的な一つの若い精神活動の現われと見るからであり、新たに來るであろうものへの展望を心がけているからである。カロッサの近業は、斷片的なもの一篇を得たのみで、こゝには扱うことができなかつた。

さて、Stefan Andres は當然補充されねばならぬ作家である、昨年度のゲーテ賞を得た C. Zuckmayer の作品も數多く考察できなかつたのも遺憾である。たゞし彼のこの受賞に對しては多いに異論が出て(註四) 前者アンドレスにすべきであつたと言う人もある。東ドイツの劇作家 Bert Brecht の作品は易く手に入つたのであるが、こゝでは扱う譯にいかなかつた。R. A. Schröder、抵抗派の詩人といわれるこの人の作品や、一般に詩の分野が放置され、評論界もほとんど觸れられていない。Dr. Johannes Pfeiffer の詩論や G. Benn の近著も本來なら觸れられるべきである。Die Sammlung 誌一九五二年七・八月號に出た Dr. Pfeiffer の現代ドイツ抒情詩壇に關する大きな論文は、必讀のものであることを記するに止める。

史的現實に對する態度

あらゆる精神現象は、史的現實に對してする人間の何らかの態度の現われであり、一層適切に言えば、その態度をとるという活動の中に現われて來る。文學もそのような活動の一つである(註五)。

作家は、史的現實にどんな態度で對し得るか？　それを圖式で示せば、無心——關心の兩極の間を動いているに違いない。

無　心。　ニーチェの言う、牧草を喰み戯れる羊群、喜戯する子供も無心の象徴である。こゝには時も歴史もない。しかし藝術家の『無心』の狀態は、想定された、限界的狀態であり、快適な深い滿足の伴う創造狀態である。それは學問によつても努力によつても修得することのできない天才の流露ともいうことができる(註六)。それは、充實された想像力(ファンタジー)によつて憑かれ驅り立てられている主體の、抑えがたい獨自の訴えを可能にする根源的な狀態であり、藝術全體を成り立たせている要件である。

二、三の例。(無心—離叛)

Felix Hartlaub: Arthenope, oder das Abenteuer in Neapel. 92 S. 1951.

〔ハルトラウブは一九一三年生まれ、史學專攻の學徒。二十一歳で右の「アルテノーペ・又はナポリの冒險」を書いた。一九四五

年、ソ聯軍のベルリン占領當時、ヒトラー大本營に戰史記錄係として勤務していたが、その時以來行衞不明となる。この若い歷史家は後述する „Von unten gesehen“ と題する素晴しい日記を殘した。」

ハルトラウブの處女作『アルテノーペ』は、ナチスが擡頭し政權を取つた前後の、ドイツの激動していた時期に書かれたものであるが、その史的現實が概して作品に反映していない。十八世紀末、フランス革命の餘波がナポリを襲い、その王國を倒して、共和政府を樹てた。新政府の壽命は六ヶ月の短命で終つたが、そのフランス革命軍進駐の期間を、時代的背景にして、若いフランスの士官と、ナポリの遊女（初めは王黨員の想いものであり、各所に出入して政治的な暗躍をしていたが、終りには共和黨に宣誓して民衆に銃殺される）とのかりそめな、しかし魅惑的な縺れた關係と、それを彩るナポリやヴェスヴィオス火山や附近の海岸の美しい風景とのまつわり合つた情緒的な物語であり、牧歌風なメロドラマである。幻想に醉う魂の流露が見える作品である。そのことが、ときに混る未熟な言葉や、飛躍する畫面の連續というような一種の統一のなさにも拘らず、捨てがたい魅力となつている。

この作家は、その妹、Geno—同じく小說家——の「兄は、表現ということで、子供の頃から苦しまなかつた、」という言葉を裏書きする。

しかし、彼が、當時の政治的社會的現實に無神經であつたかというとそうではなかつたようである。火山や葡萄畑や海岸に對比させて、人間の薄浮な政治活動を走馬燈のように描いて見せ、或いは、士官フランツを「落馬したドンキホーテ」、ナポリの政狀の變化を知らない「純理派」などの言葉で、說明しているところが一、二箇所がある。これらの言葉がどの程度にナチス政權を諷刺するものかは判らないが、何らかの重味をもつて言われているのであろう。

離叛。 現實に對するもつとも非能動的な態度に現實からの離叛がある。これはナチス支配時代に現われた特異の類型で、現實からの逃避である。單によき例として左の一篇だけを挿入する。

Carl Zuckmayer: Der Seelenbräu. 143 S. 1945.

この短篇小説は戯曲的構成をもつている。舞臺はドイツ山間の村。登場人物——魂の救濟より唱歌隊の指導に夢中になつている長老どん(Seelenbräu)と呼ばれている牧師。村の旅館經營者で造釀元でもある長者。その美しい姪(養女)。村の學校へ赴任して來た貧しい音樂教師(音樂には熱情的だが、ほかのことにかけては子供のように單純な青年)。長者の遠緣の敏腕な富豪でホテルを他國で經營している壯年紳士。村の人。唱歌隊の子供大ぜい。

この村には「時」は存在しないと、ツックマイヤーは冒頭に斷わつている。つまり、歷史をもたない抽象的な人間を、將棋の駒のように動かして、人性の眞理の一面を描いて見せようとしたもので、構成の面白さと表現の手腕で賞玩させようとする。筋は單純で、音樂教師と、若い姪とが戀に落ち入り、長老、長者、富豪紳士の怨恨、悲嘆、鞘當をくぐり拔けて、愛の力で二人は、村の子供の大合唱裡に結ばれ、ついには老人たちも、長老にとつては愛弟子であり、長者にとつては血を分けた姪であるとともに養女でもある娘を中心として、彼らの間に交えられていた長い間の暗鬪を解消して、若い二人を祝福するという喜劇的短篇。愛は窮極の勝利者という通俗道德の說教でもある。老人の歪曲された情愛と若い自然の愛情の對比。

ツックマイヤーの小說は好ましくないという批評(註七)がある。この短篇も觀念的であり、情緒に乏しく、構成されすぎていて、窮屈である。ハルトラウブの流れる文體とツックマイヤーのそれとを對比させることができる。この小說は、意識的に現實を廻避しようとしている好個の實例。人事關係の運びの呀え。若い男女の最初の出會を、吹雪の日の、長者宅で催された大假裝舞踊會にとるとか、愛の成就を、山陰の、かつて茸栽培に使われていた大洞窟にとるとか、道具立てに非凡でない力量が示されていはしても、そして人間の性格描寫など堂に入つてはいても、類型的でありすぎて窮屈である。

× × ×

人に喜悅を與える文體——流れる韻律的な文章から、重量によつて人に迫る文章にいたるまで、淋しい水色の單色から、多彩な絢爛たる文章にいたる、形式の美しさをもつ文學は、ここ「無心」の項でで言及されねばならない。Langgässer の長篇 „Argonautenfahrt“

『至寶を求めて』に挿入されている一節『孤兒の兄妹の挿話』(作者はその挿話において、この長篇小說のテーマを、歌の繰り返(リフレーン)しのように、子供の世界に縮寫して語つているのであり、)ここでは世界觀傳達の意欲は弱まり、特に文章の形式的な方面が一段と光彩を放ち、流麗な物語體となつている。また Ernst Wiechert: Jahre und Zeiten. 452 S. 1949. (『過ぎし歲月』)も、ドイツの批評家の評價はどうかまだ知らないが、この傳記のもつ、重く靜かな、時に流れ、時にためらう嚴肅なリズムはよい。彼の小說のスタイルは、彼自身も言う(註八)「微かな哀愁」„leise Traurigkeit" を帶びた「言葉の力」„Macht der Worte" をもつているのは、衆知の如くではあるけれども、實にその哀愁のメロディーのために、時に現實があまりにも輕く觸れられ或は感じられただけで過ぎられてしまう憾みなしとしない。しかしこの自傳には素朴なとさえいえる自然さが具つている。苦痛をもつて語られる晩年の戀愛の告白。自己の文學の成立した過程。彼の世界觀や文學者の在り方に對する信念。それが靜寂と興奮との交錯をもつて述べられている。主語は、「私」、「我々」、ごく稀に自分のことも「彼」。ウィーヒェルトを知るには必讀の書である。殊に、各作品の誕生にいたる經緯も多く述べられている。この書も、また「無心の流露」(註九)の一つの例と數えてよいと思われる。

關心。 この關心ということは、歷史的現實を認識し、體驗し、これに對して或る態度をとるという、一聯の因果的な行爲を指すが、それは同時に、或る態度をとるという行爲が、逆にその認識や體驗を成り立たせているという循環關係に立つ內的な活動であることは論を俟たない。

その循環關係は、態度をとるという、もつとも自然かつ自明的な、決定からしてまず各種の文學を生む、ほとんど歷史に近い戰記もの乃至はリポルタージュと稱せられる、認識し記述することに主點のおかれる作品がそれ。さらに、史的狀況に對して抵抗し、或は隨順の態度を示す無數の形態の文學が現われて來る。

ドイツで今次の大戰後に生まれた尨大な數にのぼる『戰記もの』„Kriegsbuch" は多く無名の人たちによつて書かれ、その文學的價値もまた區々であると想像され、本稿では全くこれに觸れない。ただ Martini: Deutsche Literaturgeschichte. 1950 S. 572 u. 575.

に第二次大戰を對象としている諸作が擧げられていることを指摘するに止める。また、歷史的記錄としては、本稿の執筆にも使用されている Dr. Erich Kordt: Wahn und Wirklichkeit. 431 S. 1948. はナチスの擡頭から一九四五年の完敗にいたるまでの期間を記し、完末の詳しい年表や人名表は便利である。

現實に對して抵抗——隨順の態度をとる文學。これは、今日のドイツの文學作品をほとんど網羅するであろう大きな振幅をもつ精神活動であり、各作品は、この運動のいずれかの點にその位置を占めることになるのであろう。ここでは、その典型的なものを擧げる。

まず、抵抗であるが、ナチス政治の行われた一九三三年（政權獲得）——一九四五年（無條件降伏）の十二年間、その後今日まで續く聯合軍占領の八年間。前後二十年に及ぶこの期間に、ドイツは多樣に內燃する抵抗の文學を生んだ。文學活動の外にも、政治活動として、反ナチスの秘密結社が各地で結ばれた。所謂「抵抗團體」(Widerstandsgruppe) というのがそれで、多くの場合、加盟員の名前も住所も互に知らず、合言葉があつただけであつたといわれる。ツックマイヤーの „Des Teufels General“ にもランゲゲッサーの „Argonantenfahrt“ にもその他多くの書物にその間の事情が書かれている。ナチスに抵抗した文學者では E. Jünger, F. Hartlaub, R. A. Schröder その他多くを數えるが、殊に Ernst Wiechert の Buchenwald の集中收容所での受難記 „Totenwald“ は誰もよく知るところ。また Ernst Jünger の „Auf den Marmorklippen“『大理石の斷崖にて』は「白日と夢の、或は根源的なるものとダイモン的なるものの中間地帶からの報告」(註一〇) といわれ、また「彼の書く表面の形象や文字は、內部の深さを語り、圖形に順應しているように見えていて、根源的なものを象徵する言葉である」(註一一) ともいわれ、ナチス支配の荒涼たる風景の中に、支配者には氣づかれずに湧いた極めて淸らかな淸水の一つであつた。

Felix Hartlaub: Von unten gesehen. 156 S. 1950.

「史學の少壯學徒であり、旣に作家としても一部に認められていたフェリックス・ハルトラウブ博士が、一九三九年、開戰と同時に防空部隊に編入され、東部のキュストリン市のオーデル河橋梁防備に配屬された。すると、ぢきに北部のカイゼル・ウィルヘルム運河の防備に廻され、もう十月には、ルール地方へ廻され、また十一月になると北部のウィルヘルムス・ハーフェン要港の防空に配

屬された。それから退窟な嫌な時が一年續くが、翌年の十月軍務を解かれて、フランス外務省の書類整理をするよう、在佛ドイツ軍當局から招かれて、パリへ行く。それから約一年のパリ生活——彼は祖國に對してよりも遙かにフランスに親和感を抱いていた——の後、一九四一年晩秋、このフランス外務省關係の史書官、歴史編纂官は、全く突然、ルーマニヤ戰線へ送られた。彼を知る人たちは、漸く彼がそうして無名の兵隊の仲間に潜ることができたのを悦んだのもつかの間で、二三ヶ月の後、一九四二年の初めには、誰の指金か、彼のまえの同僚、或は教授の意見か不明であるが、直接、戰線からヒトラーの君臨するベルリンの大本營、彼の言を藉りれば「颱風の中心の無風地帶」に、戰史の記錄者として呼びよせられて了つた。史書官ハルトラウブは、一九四五年の八月、大本營で消息を斷つた。〕

一九三九年—一九四五年の滿五年の軍務及び史書の仕事の間に彼は、私かに日記を書き、その記錄を妹に送つた。敗戰の後、妹によつてそれが『下から見れば』の標題で整理出版され、出版されて見ると、文藝批評家や一流雜誌の編集者から非常に高く評價され、人は彼の記錄をカヲカの文章と並べ、その狀況描寫〔註二〕の深さに驚嘆の眼を瞠つた。

例えば、ルール工業地帶の描寫。恐らくこの地方を描いた最も秀れた文章の一つにちがいない。「媒煙、霧、雨、色とりどりの煙。勞働者住宅の屋根にはシャベルで掬うほど塵芥が溜つている。褐炭を堀り起す機械、森のような鐵骨、……一晩中絶えることのない機械の騒音、石炭を粉碎する音……露天堀りのとてつもなく大きな穴、段層は……しだいに穴の巨大さを增して行く。木と木の間に自分は立つて覗く。根はもはや堀り起されて裸かでぶらさがつている。穴は所々で水浸しになつていて星や外燈を映している。……果しない、展望のきかない黄昏……この蒸氣や煙のすべてを透して陽はどうして輝き得よう……」

兵隊の憂愁、存在への懷疑は彼の文章ににじむ。パリへ來た彼は、獨軍占領後の市街や人の姿の激變に、また市民の絶望的な感情に觸れて、「滯在している間、一日も、罪の自覺から解放されたことがなかつた」と彼はある手紙の中で言つている「この悲慘を、誰か、どんなにかして、いつかきつと人間意識に言葉として齎さなければならない。その日の來るのを自分は待つ。」

彼は、空や雲の素晴しい描き手でもある。防空隊員。――史書官――空や雲は彼の友であり、そうした自然のたたずまいの中にも彼の虚無的なそして反ナチス的な感情が投影されている。ただの「暑さ」ですらそうである。「空は西に向つて白くかすれ、下の方からは、燃えさかる燈火よりももつと白い、毛を刷いたような雲が一と筋二た筋ふくれ上つて昇つてくる。戸外は日中のように明るかつた。太い石の棍棒みたいな炎暑が彼らをなぐりつけていた。」それから彼らは、小學生ぐらいの娘ややり手婆のいる、そして這いずるようにだらしなくピアノの鳴つている淫賣窟へ行き、彼は、烈しい虚脱感に襲われて逃げ出すことが描れている。

この日記の主語は、私、彼、われわれ、と時に應じて變わる。

ウクライナの農夫の、强制されているのか自由なのか限界不明の耕作の樣子、薄暮に牧舍へ歸える牛の群が、狹い橋の上で、獨軍の自動車に押されて混亂している有樣、胸の深い奥底に燃えている人間的な憤りは、氣ずかれないほどに隱され覆われている。

ベルリン占領の迫る敗戰直前の頃は、大本營は轉々と移轉され、ヒトラーの特別列車とともに、ハルトラウブもつねに隨つて動いていた。その、光を完全に遮蔽された豪華な、ただ外部を音でしか感ずることのできない車内の狀況など、異狀なまでに鮮かに表現されている。大きな盲目な生物の體内のような列車！

ハルトラウブの抵抗は、暴力の重壓のために押し拉げられ、虚無感とも織交つてはいるが、根强く、きわめて微かな隙間にも若木のように自由な反抗の花を咲かせている。

これに對比させて

Carl Zuckmayer: Des Teufels General. 137 S. 1946.

を檢討するのは興味がある。この三幕物『惡魔の將軍』はツックマイヤーが、一九三八年にナチスの壓迫から逃れ、スイスを經て米國に渡り、その市民權を得、それからドイツ敗戰の時に米軍將校としてドイツへ進駐し、演劇關係の仕事に當つている間に上梓された作品である。この書物の扉に斷つているところによると、この戲曲の輪廓は戰時中に出來ていたとのことで、現在の形としては、戰爭

終結直前の一九四五年七月に出來上つたのであり、作者の友人なるヘルムート・V・モルトケ伯他二名の絞首臺上に消えた友に獻ずる、としている。

これによると、米國の宣傳用作品と見ることはできない。交戰中に、構想ができ、書き上げられていたことは、やはり重視される。作品の內容を詳細に書くのは割愛するが、荒筋をいうと、ドイツ最高の航空機製作技術者、空軍大將、四十を越えたばかりの聰明かつ酒色の道にも敏腕、機智縱橫の自由人、ハーラス將軍は、反ナチス的言動を平然とどこででもぶち放す。そのためナチス秘密警察の鋭い監視下におかれる中に、航空機關係の生產サボタージュが發生し、その最高責任者としての責を問われ、十日の期限を付して、事件の解明を要求される。期限の最後の日にいたつて、彼は、信頼していた技師長に漸く疑惑を起し、これと對決する。と、この技師長は反ナチスの抵抗團體に屬していて、ナチスが崩壞し、ドイツが敗ければ初めてドイツ民族の再建があり得ると確信しており、ヒトラーに武器を供給するハーラスを、惡魔の手先の大將であるとして、ナチス官憲の彼に對する憎惡を利用して、毒を以つて毒を制するために、技師長一味は工場に生產サボを惹き起こさせていたことが判る。つまり、ハーラス將軍は、ナチスの秘密警察から許された十日の期限に、彼の知らぬ間に彼の抽出に入れてあつた拳銃から推しても、眞犯人の出ぬ限り死の要求をなされてをり、他方、彼はナチスと正反對の立場に立つ狂信者の一團によつて死の犧牲を强いられ、——すでに彼の親友の戰鬪機部隊長もこの一味の暗殺計畫に狙われ、ハーラスに劣らず平和を愛しナチスの暴虐を憎む軍人であつたにも拘らず、墜死をとげていた——眞に無意味な死を要求され、かくて袋小路に陷つたハーラス將軍は期限の終る最後の瞬間に、彼が最高責任者として責を歸せられている不良機の試乘を敢行して墜落死の自決をする。

ナチスの暴力政治とその追隨者たちとに對する人間的な平和と自由を愛する立場からなされた抵抗が、この戲曲に盛られていることは勿論である。また反ナチスの暴力主義に對しても批判をなしていることも明かである。そのように、この作品が、兩極端に對抗する作者の平和的・人間的立場を展開して見せてはいるけれども、そしてツックマイヤーの手腕は、ナチス支配時代の軍上層部の生態をば

如實に寫しはするけれども、全體の調子が、現實から浮いてをり、例へばハーラス大將があまりに機智に富む聰明人であり、彼をめぐる事態の深刻さと調和を缺くうらみがある。作者の企てる對照の妙があまりに烈しすぎるのである。第二幕目の彼ハーラスの居室の道具立てにしても、故意に、自由なそして不幸な技術家の住居らしく極度の索漠とした混亂の支配している樣子にして、彼をめぐる戰爭下の現實と離れさせつつ、逆に彼の在り方を鮮明にする效果を狙うものであるけれども、狙いが強すぎて、やはり結果としてはハーラスを現實から浮かして了つている。

そして、作者が俳優に要求している急所々々の仕草の多くは、效果的ではたしかにあるが、その狙いがやはり強すぎ、そうした技巧上の作意が目立ち、全體として觀念的な感じを消すことができない。そして最も端的に云うと、作品に示されているヒューマニズムが、實際、安手であること、ハーラス大將の歷史的內省自覺がどこにも吐露されず、彼の試みた抵抗や死の抗議が、それ故に運命的な重壓を帶びるにいたらないこと、これがこの作の、缺陷ではあるまいか。この芝居が何故ドイツで大受け(註一三)をしたかの問題も面白いテーマであるが、つまるところは、舞臺效果は多分に考慮され、かつそれを裏づける作者の腕によるものであるのはたしかである。ドイツ民族の「誠實」の美わしさを强調することも忘れられていないし、また、ハーラス大將の死の犧牲によつて、案外に妥協的な中道で問題が解決されているのも、敗戰後のドイツ大衆の神經を和らげこそすれ、傷痕を破り新しく血をほとばしらせるようなことはなく、歡迎されたのであろう。しかしこれが高級な看客層にどの程度に受けたかは別問題である。

Albrecht Goes: Unruhige Nacht. 87 S. 1950.

〔今年四十五歲になる新教派牧師、詩人であり、評論家であり、短篇小說の作家でもある。彼の小さな詩集 „Gedichte 1930—1950" は、現在のドイツの詩壇で見逃すことのできない佳品である。詩の卓拔な哲學的評論家プファイファー Dr. Johannes Pfeiffer はゲースの詩と、短篇小說の價値をきわめて高く評價している(註一四)。〕

この、專門家に好評であつた『"不安の夜"』という短篇小說は、ゲースが第二次大戰で嘗めた體驗の物語りであり、よき魂の訴え、或

は告訴狀である。

内容。ウクライナに置かれたドイツ軍病院に一人の從軍牧師が配屬されている。懶惰な、投げやりなそして不潔な病院の營みを愛さないで、平和と自然を愛するこの牧師は、病院を拔け出して、野原を逍遙する。晩秋の朝の大氣が冷く黑土や草をうるおし、ブク河を越えた向ふの丘陵や教會の上に强烈な靑い空が擴がつている。病院には、軍團本部から牧師宛てに卽刻出頭の命令が迎えの自動車とともに來ていた。二時間の疾驅、兩側の向日葵の畑の黃色い無限の擴り。灰色の巨大な軍團本部、その軍司法官室、そこへ彼は出頭するが、その空氣は獸の巢窟。司法主任の將校から、明朝六時に執行される死刑の立會を命じられる。

彼は、その足で死刑囚に會うために監獄へ行く。すでに夜、守衞室もまた獸どもの巢である、監獄の長い廊下は、しかし彼が昔いた修道院のそれに似て森閑としていた。霧に包まれたようなうつろな眼をした若い死刑囚を見る。

監獄の出口のところに、明日の刑執行の射擊分隊長が、暗い外燈の陰に、宿所へ歸る牧師を待ちわびていた。その老中尉と烈風の吹く街を、牧師は肩を並べ風を避けつつ行く。彼らの會話は運命に關する悲痛な嘆きである。老中尉も招集された牧師であつた。彼は人殺しの任務をいかに廻避するか苦慮している。この任務を、故意に彼に與えたのは司法主任の將校であり、その男は、實にもと彼の教會で働いていた助祭であつた。村の教會を逐電して數年、今ここに上官として彼の前に現われ、彼にこの任務を課した。强風はたけり、二人の牧師の歩みは苦し氣である。

軍宿泊所。ここはスターリングラード攻略戰の兵站地であり、軍關係者の夥しい出入で混雜をきわめている。從軍牧師は一室を得、靜かに死刑囚の調書に讀み入らうとする。と、ノックが聞え、一人の美しい靑年將校が同宿を求めて來る。階段の下には、死地に行く彼の跡を追つてその許婚の少女が來ているのだ。從軍牧師は、二人の男女を自室に入れ、それが恐らくは袂別となるであろう彼らの結婚を、形式を經ない純粹な形で祝福し、勇氣ずけ、道にはずれた行いでないと教え、彼らに自分の床を貸し與える。これもまた戰爭に對する人間の正しい抵抗である。

牧師は調書を讀まねばならない、そのまま部屋の机について死刑囚の履歷や犯罪の經過に沈潛して行く——囚人は孤兒の若い兵隊で

あつた。一人の子供をもつたウクライナの戰爭未亡人。その子との結び付が發端となつて、若い母親との間に愛が芽生え、その戀愛のために、この兵隊は、知らない間に軍機を漏洩していた。軍法會議にかけられ輕い罪に問われたが、無智な彼は、その護送列車から飛び落りて逃走し——この逃亡の罪によつて、死刑を宣告されたのであつた——彼は女と子供をつれ森にひそみ、食物を探し、恐らく樂しい夜夜ももつたろう……傍らの寢臺から傳わる新婚者たちの睦言と、森の中の憐れな男女の交合とが牧師の聯想の中で縺れ重なり、窓外に嵐の音がはためく。戰爭がなければ、この囚人は罪を犯しはしなかつた。

はためく窓を閉めに、今宵妻となり女となつた美しい人は、寢臺をおり、牧師の傍にむせるような肢體をのばして窓を引きよせる。牧師は身内に湧く異樣な情感に驚きつつも、その情感の深みを思い、かかる我を容認する。——これは傳統的な宗教に對する人間の主張であろう——その死刑囚には言うべきほどの罪はなく、しかもこの極刑に處されねばならぬ。兵營のほかに家をもたない、孤兒の優しい兵隊。強い抗議が牧師の胸を嚙む。牧師は監獄へ行く。午前四時。囚人に刑の宣告を傳える。その緊迫した憐れな情景はよく描かれている。(ゲースは、この『不安の夜』を書いて間も無く、深刻な斷章『人間の臨終』„Unsere letzte Stunde.“ 1951. を發表した。右の、戰爭中の異狀な體驗を、思索の域に高めて彼は、死という事象の極限の領域にまで立ち入つて、その不可知の事態に解明を與えようと試みている。)

拂曉に刑は執行される。刑場の光景も嚴しい簡素な筆致で描かれ、人に迫る。一齊射擊寸前の、嚴肅な一瞬。突然、從軍牧師の制止の聲があがり、死刑囚の前へ彼は近より、最後の慰めの言葉を與える。牧師が自己の位置に歸つた時、かの射擊分隊長は、號令によらず、僅かに片手を擧げる措置で射擊命令を下し、轟音とともに囚人は倒れる。

牧師の突然の制止も、分隊長の無言の擧措も、ともに不當の運命に對する抗議であり、軍という巨大な機械の中では、それが彼らに與えられた反抗の限度であつた。歸路、司法官と自動車同乘。痛烈な會話の應酬。中途下車。空路で軍病院へ歸任。空中で層雲やしゆう雨に遭う……暗い音樂的幻想。

ゲースのこの短篇小說は當然抵抗の文學の中に入れることができる。對象物や作中人物に對する作家の態度が、同感にせよ反抗にせ

よ、きわめて現實に近い。そして長い抒情詩や評論の生活で鍛えられている感受性が文中に輝いている。彼のメリケの傳記的評論も記憶されてよい。Albrecht Goes: „Edward Mörike, Biographie." 95 S. 1938.

抵抗の文學には、さらに多くの宗教的作家の作品を加えることができる。例えば、Edzard Schaper: Stern über der Grenze. 60 S. 1950.（『邊境の星』）やウィーヒェルトの最後の大作 „Missa sine Nomine." 557 S. 1951.（『名前なきミサ』）は明かな抵抗の書であるし、Werner Bergengruen. の „Das Feuerzeichen" 260 S. 1949.（『籌火』）も隱蔽された抗議の書である。

Edzard Schaper: Stern über der Grenze. 60 S. 1950.

〔シャーパーは一九〇八年東ドイツのポーゼン州に生まれ、若くして故國を離れ、北歐諸國を流浪していた。いつ頃から小説をかき出したか明かでないが、エストニヤに暫く落ちついていた一九三〇年の頃かも知れない。彼は今次の戰爭にフィンランドの正規兵となつて對ソ戰に戰つている。戰爭後、フィンランドからスウェーデンへ逃れ、一九四七年以降スイスへ移住している。〕

シャーパーは、前歐洲大戰以降、こんどの大戰に到るまで所謂ドイツとソ聯の接衝地帶として知られる、東ドイツを含める東ヨーロッパを襲つた永い、ほとんど絶え間のない混亂狀態を、全身で體驗した。この地帶に住む、諸々の小民族に屬する人たちは、當然、いろいろな角度からこの歷史的な動亂を受け取つた譯で、シャーパーは新教的信仰を守り、神に支えを求めることに活路を見た。したがつて、その態度は、ソ聯支配に對する離叛の形で現われる。と同時にまた、ナチスの暴力政治に對しても、彼は背を向ける。彼に必要なのは、心の平和であり、良心の自由である。ソ聯とドイツの戰爭が彼の敵であり、國際間の戰爭狀態、即ちいまの歷史的現實が糾斷されねばならない事態なのである。

シャーパーは少年期をドイツで過し、その他の時期は比較的多く外國に生活したが、彼の用語も文體も古典的なドイツ語であり、骨組の太い手法、大きな筆致をもつている。しかし、その半面、細かな感情の綾を、表現する技術に長けているのは特筆されてよい。こ

の『邊境の星』は彼の作品中でも佳品の一。

内容。東ヨーロッパの涯の人煙稀れな沼澤地帶に一と筋の河が流れていた。その畔に小舍が立つており、そこには妻を亡くした草炭堀の男が、十を頭に四人の子供を抱えて、激しい缺乏と闘いつつ生きている。この地帶は以前は森林であり、彼はその森番であつた。いまや、その河流がソ聯とドイツの境界線となり、河の兩岸から森林は伐り拂われてしまい、ソ聯側には高い照空燈の鐵櫓が立ち、ドイツ側には、草炭堀の小舍から數キロ離れたところに兵舍が立てられて時には兵隊が小舍のあたりまで巡廻して來る。――この父親と子供が置かれている狀態を問題にしていることは明かである――父親は草炭を一日がかりで遠くの村へ積み出し、それによつて暮しを立てている。酷寒の領している雪原の國境地帶、燈もなく堀立小屋の中で、四人の子供は凍えながら父親の歸りを待つ。晝間、巡邏して來た兵隊に貸したマッチを忘れて持つて行かれてしまつたために、竈に火を作ることもできない。東歐の嚴冬。夕方暗く、そこへ、疲れきつた父親が、クリスマスの夕である、クリスマス・ツリーや蠟燭など貧しいながら贈物を村から買つてもつて來る。子供たちの一年に一度の切な願をかなえてやる心であり、この贈物を待つ緊張がなかつたら、子供らは寒さのために凍えて死んでいただろう。父親は飢と寒氣を冒して、火を貰うために一本の蠟燭を携え凍りきつた雪原へ出て行く。雲は厚く垂れてい、ソ聯探照燈が時々投射する。父親は幻覺の中に雪原が燃え上るのを見、キリストに遭いその巨火を得て、雪の原で凍死してしまう。凍え切つた小舍の中で父親を待つていた子供たちも、父とキリストの幻影を見、垂れた雲の中から星が招く光りを投げるかのように錯覺して、小舍を出、雪原に父の後を追う。結局、ドイツ軍の兵營に辿りつき四人の子供たちだけは助かる。意味は、淋しい物語であるが、筆力が強い。

文中に、ソ聯側が、ドイツの兵隊の立てたクリスマスの大きなツリーに機關銃掃射を浴せることを書いている。ここではシャーパーは、降誕祭を祝うドイツ軍により近い感情を見せている。しかし彼の意圖は、このような境界自體の存在、このような歴史的狀況の不當を衝こうとするにある。「境界。雪中に固まり、氷と癒着しているこの傷口は、今宵また血を吹き、いつまでも、決して、閉じ快癒することはないだろう」と云つている。

シャーパーの抵抗には、大きな歴史の流れに對する批判があり、國と國との間の在り方に對する批判がある。やはり彼の體驗が基調

となつている。次ぎの作品もやはり抵抗を内に藏しているもの。

Werner Bergengruen: Der spanische Rosenstock. 71 S. 1940.

〔ベルゲングリューンは一八九二年東歐リガ市に生まれ、ドイツで教育され、ドイツで作家として生活したスエーデン人系のレットランド人。ナチスに烈しく壓迫され、一九四二年には彼のミュンヘン市近郊の住宅に投彈されるにいたつた。難をオーストリヤのチロールに避けたが、一九四六年—終戰後——にスイスのチューリッヒ市に移つた。カソリック的な信仰が彼の作品の基調に流れている。〕

『スペインの薔薇』はナチスの迫害が彼の身邊に降りそそいでいた頃の作品。

内容。しばしの別離をまえにして、若い詩人がその愛人に殘す一篇の物語である。その物語の筋は。或る遠い水鄉地方を領している公爵の官邸に貧しい男が仕えていた。いつか彼は公爵の姫と相愛するようになり、姫を妻として迎えるために必要な富と名聲とを得るために遠國へ立つて行く。その旅立のまえに、遺見に彼はスペインの薔薇の木株を姫の許に殘した。薔薇が萎れれば男の生命は危殆に頻している時であり、枯れた時は、男はこの世に居ないことを告げる不思議のバラであつた。「忘れずに滿月の夜には窓邊に薔薇の鉢を置き、月光に照らさせて下さい。私は月を眺めましよう、そうすることによつて二人は結ばれるのです。」

男が立つたあと、他の求愛者とその狡智にたけた妹とが宮庭に現われ、姫の薔薇に對する異狀な愛情の秘密を、彼女の幼ない人間的な隙に乘じて、看破し、奸計によつて薔薇の木株を焚き捨ててしまう。しかし薔薇は不思議にも外の地に生き永らえ、遂に榮え、若い男も名をなして歸來する。

一見、淡いロマンチシズムの外皮に包んで男女間のモラルに關する靜かな懷疑や、少女のもろい心裡の陰影を描く所謂美しい物語のようであり、「無心」の章に擧げられるべき作品のようでありながら、實は、底に、ナチスの壓制に對する詩人の怒りが流れていると見られる。文學史家が、彼を抵抗派の作家の中に數えるのは當然である。水鄉に舞臺をとつているのは、ベルゲングリューンの故鄉リガ市近郊のデュラ河下流地帶を想起させるが、これは、事件の發展と深い關係をもたない。作意をそれによつて擬裝するものに過ぎない。

作品の眞意は、作者が薔薇の株—作品を、少女—ドイツの純潔な人たちに殘して去ろうとする袂別の挨拶を意味すると見られる。

隨　順。　われわれがいま見た『邊境の星』、『スペインの薔薇』は確かに抵抗の文學でありながら、他面全篇を覆う諦觀の色調を否定することができない。元來、抵抗と隨順とは一つの事態の兩極であるに過ぎず、前者には後者の面があり、逆に後者は前者をその中にはらんでいる。よく檢すると、例えば、『邊境の星』では、敬神の主人公を、森番から草炭堀に轉落させ、戰鬪狀態にあるに等しい二國の國境線に定住させ、——これは狀況への順應であり、現實を運命として受容させているに他ならない——その上に、法悅の中に神の懷で命を落とさせている。『スペインの薔薇』も、四圍の狀況から相愛の仲をさかれるということは決定的事實として容認され、淋しいロマンチシズムがその諦めから生れているのも否定できない。

またハルトラウブの『下から見れば』も、そこに描き出される一切の事象が、深い哀れを湛えた狀況（Lage）の中に浮んでいるのを見る。そうした狀況は、或る運命におかれている自分を自覺している主觀からして初めて流れ出て來る。

ナチスに最も強い抵抗を示したドイツの作家、その勇氣の故に愛される作家、ウィーヒェルトの諸作がこの隨順の項下で論じられても不思議ではない。彼の死（一九五〇年八月二十四日）の直前數年間は、彼の生涯の中で創作活動の最も旺盛な時期であった。有名な„Totenwald“『死者の森』ブーフヘンワルト集中收容所での受難の記も、この時期の作、そこにも隨順の雰圍氣がある。その他の重要なこの期の諸作品については、ここでは觸れないが、ただ、この項の下で、『童話』二篇（„Märchen.“ 2 Bde. 413 S. u. 398 S.）は扱われてよい作品であり、色彩はむしろ單色で淋しいが、子供らに慰めを與えようとする老作家の意圖はよく汲むことができるとだけ記して割愛する。ここでは彼の最後の大作『名前なきミサ』を檢討する。

Ernst Wiechert: Missa sine Nomine, 557 S. 1951.

內容。東ドイツに領地をもち、三幅對と人に呼ばれ、ヴァイオリンの三重奏をこよなくよくした三人の貴族の兄弟と、その領民たち

が、今次の戰爭によつて、その生活の本據を追われ、チューリンゲンのレーン高原にある小領地「沼の原」へ集まる。不毛の濕潤地帶のこの高原に、打捨ててあつた羊小舍と、一と群れの木小舍とに彼らは住み、貧しくはあるが、自由な、そして魂を淨化する生活の根を、徐々にそこに下ろして行く。「沼の原」の片隅には草炭が採れた、それが彼らの生活の糧となつた。

彼らはナチスの支配と戰爭とによつて、背負いきれない罪を負つていた。最もそれによつて苦しんだのは末弟アマデウスである。彼は、「沼の原」の奥に住む森林官の密告によつて、集中收容所に投獄され、四年の間、苦の谷に呻吟した。一度脫獄を企て、ある農家に救いを求めた。夫を戰地に送つていた若い農婦は、救うと欺いて熟睡している彼を官憲に引き渡してしまう。この體驗は彼の人に對する信頼の最後の一滴をも枯らしてしまう。彼はまた投獄され、一人の獄吏を殺害する。その直後に進攻して來た米軍によつて釋放され、「沼の原」へ辿りついたのである。

原には霧が流れ、柳の倭木が芽ぐみ、いたるところに擴がつている水溜りや池には夏の雲が姿を寫し、野鳥は原を緣どる松林の中で鋭く啼いた。そして池には薄氷が張り、雪が「沼の原」を覆う。三年の歲月が流れ、彼らの草炭の採掘も靜かに進んでいた。三度び彼らは、アマデウスの住む羊小舍にクリスマスを迎え、この祭典はあたかも道標のように、彼らの活計の遲々とした改善や、魂の安靜と淨化の深まりとを記錄した。この三年間に起つた大きな事件は次のようなものである。

仲兄は大農場をもつ婦人と結婚して原を下る、長兄も原を下りて村で歸還者や難民救護の奉仕生活に入る。アマデウスと領民家族たちは、よりよい生活環境を提供しようという仲兄夫婦の招きを斥けて、依然、彼らの「沼の原」に留まつている。彼らは生活の安定よりは、魂の自由を求めた。アマデウスは、橇の先頭に立つて、帶皮を肩に當て草炭を牽いた。平坦地の部落の人たちも彼を見て次第に嗤わなくなつた。

「沼の原」の奥に住む森林官の娘バルバラは曾つて烈しい火のようなナチス心醉者であつた。彼女はアマデウスに對する私かな憧れを自覺しない、逆に平和を愛する彼を迫害し、原の附近に出沒していた殺人鬼に身を任かせ、その子を孕む。そして仲間に憎い彼アマデウスを狙擊させる。

アマデウスは擊たれ、原の小徑に倒れていた。朦朧とした意識の片隅に、彼女が叢の蔭から彼の苦しむ樣を窺つているのを感じ、二人の間に奥深い會話が交わされる。バルバラは、にわかに彼の生命の尊さを感じ、救を求めに驅け去る。出血は烈しかつた。それはあたかも彼の身内にうつ積していた責罪の血が流出するかのようであつた。人間に對する絶望も次第に薄らいでゆく。

バルバラは殺人鬼の子を産む、分娩の時、失神し、過去の記憶を喪失し、その子をアマデウスの子と信じ、日夜、彼の住む羊小舍を訪れ、彼もまた無心のバルバラをいたわり、その子を、神は自分の犯した殺人の罪を拭うために與え給うた惠みと信じ、己れの子として、イレーネ(平和—女名)と命名し、養育する。彼のこの決意は祈りであり、贖罪の精神に發する。彼らは最後まで結婚しない。バルバラの記憶は返えり、常人に戻るとともに、彼に對して犯した罪の意識から、自己の生涯を彼のために捧げると誓う。ウィーヒェルトは二人の關係を精神的な愛の連がりに止めておく。

「沼の原」に結ばれた小數の人間たちの共同體は、下界の社會と對立する。明かにウィーヒェルトはそれを意圖している。長兄と仲兄は下界に下つて、奉仕と農耕の二た筋の正しい道を歩いているが、それを彩るさまざまな、敗戰國に普通見られる事件が生起していた。賭博團あり、妖婦あり、死んだと思われていた三兄弟の母、伯爵夫人、(因習にこり固まつた救い難い人)、が現われる等、それら悉くは、「沼の原」の人たちの、一途な、魂の自由と責罪からの淨化を求める清純な信仰生活とは對蹠的である。

「沼の原」の共同體は、一つの信仰に結ばれている結社である。その信仰を代表するのは、下界からこの原へ上つて來、そして止まつたたつた一人の人、町の教會を放棄して、むしろ汗し草炭を堀ることに神への近ずきを信ずる牧師ウィトコップである。彼は原の人たちの魂の守護者であり、實に晩年のウィーヒェルトの信仰の代辯者であると見られる。

彼らは、神の怒りは彼らの頭上に終熄して宇宙的な神の法則が彼らを支配し初めたと信じ、この星辰の運行をすら支配する雄大な法則に隨順しようと願う。牧師ウィトコップは言う「われわれは教會も祭壇も教壇も持ちはしない。けれども愛する神はわれらに一歩近ずき給うた！　神はこれまでのような大きな教會の中には住まうことを好み給まわない……まことに多くのことが地上には起つた……それら一切を單に試煉と見、ただその傍らに立つていてよいものであろうか？　それらは試煉以上のものなのだ……人は以前には運命

をもたなかつた……けれどもいまや人は運命を持つ……一人々々が死神に、火焔に、首斬人に、そして暴力に憑かれたのであり、その悉くが人を變えてしまつた……各人は孤獨に神の前に立つている……神は一人々々を選び、一人々々に語られる」と。

即ち、「沼の原」には運命が成立し、運命の受容がそこには行われているのである。

運命の成立

運命という主題は、今日の西ドイツの文學作品とは緊密に結ばり合つている。これはもちろんウィーヒェルト一人の主要なテーマであるのではない、彼とは違つたいろいろな、むしろより鋭く深い角度からこの問題は、他の多くの人たちによつて扱われている。ウィーヒェルトの『名前なきミサ』は、史的な現實によつて投げられた不可避の災厄と責罪との血しぶきを全身に浴びた人間たちが、その再生と淨化の道を、われから選んで進む、神への歸依の書である。

その中で牧師ウィトコップにも言わせているように、一般に運命が成立するのは、史的現實としての現實が前提となり、その現實を、自由な各人の決意において、己れのものとして受容したからに違いなく、この自由な態度の決定が人間的生長の、或は變化の、(ウィーヒェルトにあつては淨化の)可能性の根原となつている。これらの事態の解明は、近代哲學の、歴史や人生に對する反省が齎した深い洞見である。しかし『名前なきミサ』では、一人々々の運命は、神の前に孤獨で立つ選ばれた個々人へ贈與されたものであつた。そしてこの作品は、そのようなさまざまに贈與された運命の相關關係を、大きな支配する運命として、鳥瞰的に顯示しているのである。そこでは、運命自體が何であるかの疑問をテーマとしていない。例えばアマデウスにもバルバラにも、「自分はどこに立つているのか」の疑問や「いま在る自分」への疑問は存しない。彼らは與えられた運命を自明的に受け取る、責罪の重荷はむしろ神の恩惠として自己の意志において荷われる。

つぎに取り扱う作品は、運命を、史的現實と自己存在との關連において反省する。その反省の方法・態度は違うが、運命と結ばれている人間存在そのものへの批判や主張から、運命を神の攝理と見る徹底した宗教觀まで、さまざまの內容の作品である。それらは西ド

イッの評論家の間で多く論議され、また廣く讀まれもしている作品である。

決定論

Hermann Kasack : Die Stadt Hinter dem Strom. 600 S. 1949.

〔カーザックは一八九六年、ベルリン近くのポッダムに醫者の子として生まれ、フィッシャー出版社で働き、その編集に參畫していた。元來抒情詩人として知られ、彼の二十五年間の勞作を纏めた詩集 „Das Ewige Dasein" 249 S. 1943. がある。〕

カーザックは、この『流れの背後の町』を公けにした時、こう述べた。

「私は一九四六年の夏——ドイッ敗戰後一年——この作品を書き上げた時五十歳であった。年齡としては毀譽褒貶に誤まられてはならない頃である。私は年代記者となって地獄へ陷ち、われわれの地上の生活をそこから回顧して、もろい、ガラスでできたようなわれわれの現實の狀態 (Situation unserer Wirklichkeit) を描いてみた。私とともにこの物語に沒入するほどの讀者は、存在に對する以前とは違った態度を學びとるであろう、もうあまり物に驚ろかなくなるであろうし、以前にまして落ち着を獲るだろう。……また個人としての自分をあまりにも嚴肅・崇高に扱うという行きすぎから脫れるであろう……今日のブルジョア的・市民的時代を反映して、今までのドイッ文學の中心的なテーマは個人の運命であった。本書は個人の運命というよりは、集約的現象としての町を (die Stadt als das Kollektive Geschehen) 主題としているのであり、私は一切の偏見から離れ、教會的ドグマや社會的イデオロギーにも災いされずに、無遠慮に、私たちが現に在る動搖し崩壞に瀕している存在の樣相を集約的に描いた……云々。」

さて本書の標題は何を意味しているか、というと、「流れ」は生命の世界と死者の世界を畫する境界線である。この境界線に接してそこから擴がっている死者の世界が「町」と呼ばれている。死者はしかし生を保ち、彼らの行動は金屬音を發するかのように非生命的、無機物的であるが、その背後には深い陰影がただよう。

構造。これは筋らしい筋のない小說である。強いて言えば、少壯考古學者ローベルトは、自殺した愛人アンナの跡を追って流れを越

え、この町へ入つて來る。すべての建物は外壁を殘したままで、內部は崩壞し、窓の穴から空が眺められた。市街は淸掃されてはいるが、落莫とした殘骸の町。ここを統治するのは市廳であり、その長官は知事である。彼は遠方の山岳の奧から指令し、誰にも姿を見せない。ローベルトは市廳に出頭して、古い市門の基底に設けられた市の歷史編纂所の編纂官に任ぜられる。彼はかくて町の年代記者となつて、人間存在を貫く法則を、この町のさまざまな事象について洞觀した。その觀察された事象や、死者と交わされた會話が、この小說に記錄されている。その一見バラバラの記錄から作者カーザックの傳達しようとしている一貫した存在觀を窺うことができる。

まずこの町は、この作品の出來た被占領後一年の頃までのドイツの荒廢に歸した都市とその市民の死のごとき生活を基盤として描いていることは疑いを容れない。町が廢墟の町であり、配給制のしかれている町であり、女の死者たちは眼には見えない衣類の手入れや保存に、身振りで、浮身をやつしており、市廳は占領軍の行政機構を思わせ、長官は占領軍司令官を思わせるに充分である、等々。したがつて、この小說にも一種の抵抗の氣配が存することも確かである——例えば、市廳がローベルトに町の歷史編纂者として莫を多量に配給しようとしたのに對し、これを後者は拒絕する場面がある——が、抵抗はこの作品の本質ではない。そうではなくて、被占領初期のドイツに領した荒廢した無氣力な生存の實狀を基礎として取り上げ、存在の本質を究明しようとしている。

しかしそのような外形的の現實ばかりでなく、その基底の上で行われる精神的な現實を、このことが重要なのであるが、單にドイツという特殊な地域に限定しないで、もつと廣い、いわば歐亞的な一個の精神現象と見、それを自然的な法則として理解しようとする。その一種の悟りを傳えようというのが主な作者の意圖である。

この假空な小說の主人公、歷史編纂官ローベルトの勤める場所は、死者の町の文庫、卽ち歷史編纂所であり、ドイツは言うに及ばず、ヨーロッパ、印度、シナ、チベット、また日本の（禪の）文獻や、人間の事蹟に關する尨大な記錄が保管され、そこには十二人の役人が整理に當つている。（十二人とは、時間を平面的に言い現わしたものと解される。）そして彼らはこの尨大な文書の價値の決定をし、取捨と陶汰の廣大な事務を處理している、しかしそれは法則的な自然陶汰であることが暗示される。ローベルトはこの巨大な仕事の中心に居り、彼が文庫で、また町で觀察した一切のことがらが、いつのまにか自然に、彼のノートに書き込まれている。（この小說はかくし

て彼の手を經ないで出來たのである)。從つて歴史編纂官が、記憶し回想し觀賞しそして創造する精神の行爲と、この文庫で行われている文化形成の行爲とが同じ規準で行われていることが意味されている。即ち、そこに雄大な自然的法則の支配のあることが示される。

しかし逆に裏から、筋の面からこの小説を見ると、――全篇にばらまかれた僅かづつの説明をつなぎ合わせると――妻子のある少壯の考古學者が、友人の醫師の若い妻(もと自分の研究室の助手であつた)と戀愛に陷り、後者は現行の法律と現實の魂の要求との矛盾のために自殺する、それを男は追想し、人間の死という現實に逢着して、ついに人間の生の營みについて、普遍的な洞觀に達し、この書を草するにいたつた、ということになる。ローベルトとその愛人アンナの戀愛や、遭遇については全篇を通じて十頁程度を與えているだけで、それも男の回想が薄れるに從い、兩者の關係も稀薄化し、女はついには、高山の尾根の岩の道に巫女となつて、霧の中から謎の言葉を殘して永遠に消滅してしまう。戀愛は、この洞觀を齎した契起として重要であり、この洞觀に現實の基底を與える意味で重要であるにすぎない。本書の內容は、そのようにして成立した、ローベルトのさまざまな死の町に於ける觀賞の羅列であり、ゲーテの「ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代」を思わせる飛躍の多い事象の羅列は、しかし、次の二つの意味を展開している。

一、決定論的人生觀

二、現代文化の批判

(一)は、いまのドイツの首要な思想傾向である實存哲學的な考えに反對するものであり、人間に可能な自由性を否定する。これまで述べた作品のどれもが多かれ少なかれ人間の自由な決意や良心、人間の尊嚴を直接・間接に扱つていた。しかしこの作品はちがう。

ローベルトは、文庫の歴史編纂係の長(ローベルトの下役ではあるが彼を指導している文庫の古老)が新たに屆いた文書に眼を通しているのを眺めながら、「初めて彼(ローベルト)は町やその文庫が退窟ないまわしいものに思われて來た。自分が、つまりは監督すべき何物をもたない監督者であるかのような氣がして來た……彼自身がなした觀察を記述しようとしまいと……人類の進歩や歴史にとつて、また生者や死者の喜悅や悲嘆に對して何ら影響を與えはしないのだ」(五一七頁)と、また、

ローベルトの一友人「起つたことはみな必然だつたのだ、形而上學的に考えれば、僕の運命はこれでつぢつまが合つているんだ。解

るかい？　ピチッとね。」(四九四頁) また、

ローベルトの獨白――「われわれの人生は」と苦しげに呟いた「死へ進む自然の道以外の何物でもないのだ。」(三二四頁)

人間の自由を否定する似た言葉はいくらも引用し得る。

つぎに (二) の現代文化の批判は、(一) の場合と同じく全篇がそれであり、引用し切れるものではない。外廓だけ殘つた廢墟の死者の町は、戰災の町であると同時に、カーザック自ら言うところの「ブルジョア時代」の殘骸であるに違いなく、アンナとローベルトの戀愛の破局も、現代の結婚という觀念や結婚に關する法律の不自然さから來ている。

法律家「まだ何も終つてはいません、すべてこれからなのです」アンナ「嫌ですわ、私もう自由だと思つています」(アンナは自殺してしまつているから、そう言う) 法律家「そうはいきません、過ぎたことは知らない、ご破算にしよう、と言つても駄目です」アンナ「だつてそのことは私たちのもう濟んだことですのに？」と烈しく言つた。(一七一頁)

巨大な教會建築はすでに半ば土中に埋沒して町の廣場に立つていた……圓天井に嵌め込まれた大きな眼は、神のそして惡魔の假面を捨て……人間たちを、そして彼らの運命を、實に所在なげに、蠢動する虚無 (ein kribbelndes Nichts) ででもあるかのように、じつと瞠めていた。(一二六頁)

ローベルトは十字路に來たり、人々の喧騒に牽かれて市場へ來る。男ばかりの群。興奮し、怒鳴り、口論し、離れ、また他へ行き商談を初める。妙な長靴、時代ものの百姓の胴着、ステッキ、萬年筆、生産のない古物の闇市。――ローベルトが市廳から貰つた札は歡迎される。(二〇六―八頁) ――戰後の闇市場である。外國貨幣の悦ばれる。

地下工場――番號と化した勞働者、石の原子粉の生産競爭、需要とは無關係の競爭。(二七二頁)

キリスト教――ローベルト「白人のドグマだ。僕はますます明らかにこれから離れる」元神學教授「祈りは西歐的な思辨の形式なんだと、あなたは言われました。思辨するんですね、思辨することのほかに支えはないですもの」ローベルトは、神學者がこの死の町へ來て死後の實相に觸れて失望しているか、訊ねてみた、すると神學者は「ありのままに言えば、落膽してます、思辨は實に苦しい生の

試煉ですね。」(四八五頁)

これらの現代の文化や日常の生は、「蠢動する虚無」として、描寫されているのである。

以上の、人生觀や文化に對する批判は、表面は、人間の意志の自由や、價値の決定に窮極的には許されている自由をすら否定しているかに見える。しかし、ローベルトは町の住民との接觸をはかり、面接時間を設け、また講演もしたが、ある講演會で彼は、「すべての眞理は僞瞞だ！」「人間は最高の創造物だ、などと俺たちは欺されていた！」「人間は世界の最下級の糞尿のかたまりなんだ！」「人間は自然の泡沫！」などと怒號する會衆をなだめて言う「私は、人生とは死への道だと言い、死の象徴だと言つても、それで諸君に何らの慰藉を與えていやしない、慰藉というものは信ずるところの愛から來るからである。けれども私が話した人生に關する知識は諸君に、個人の苦惱を超えて永續するある深い意味を與えたことと思う」と述べている。(三二五頁) また「私はこの町で行われる一切の事象の中に、恩惠というものを含まないある法則の支配しているのを知る」(四八五頁) とも言う。それが「自然の法則」であり、それが、作者によつて提唱される運命觀であり、會衆の「隨順の愛」(gläubige Liebe) を招待し、自由なそしてすなおな受容を誘つている。西歐的な運命觀が破棄され、唯物的な決定的な運命觀が、東洋的風味を含んで主張されている。

なお、カーザックには、右と同時期に出版された短篇『織機』,Der Webstuhl" 60 S. 1949. があり、これは全く、『流れの背後の町』の雰圍氣から成立した作品である。『町』では、彼の所謂「自然法則」の空間的な解示がなされたが、この『織機』では、その歴史的展開の解説がなされている。(本書は『町』の補足である。)

經濟機構の史的發展を、手動の織機から——黄金でできた、金融資本に庇護され、將軍や總裁に支配される動力織機にいたる發展で象徴させ、その支配者の變遷も述べ、それによつて織り出された文化・政治の絨氈織が、ついには國土全體、住民の家屋の屋根までを覆いつくす狀態となり、生産競爭となり、現在の荒廢が來た、工場も倉庫も官廳街も空中に飛散してしまつた……この經過をカーザッ

クは明確に自然法則の歸趨として記述し、そして言う。

「一切は時の流れの中にすべての痕跡は後かたもなく消え、僅かに博物館に殘るのみ。ただ廢墟が荒凉として置き忘れられ、湖水のかなたに（ここでは『町』の流れが湖水—止水となつている）……いまわしい眺めを曝している。（五八頁）……この事體の趨移の説明は重要ではない……それは一個の有機的な發展（ein organischer Vollzug）であり、……歴史進行の中の……企業の破滅的末路なのだ……この機構が全面的空轉によつていつかは不合理性が實證されるとすれば、破壞的行動は必要でないというのも理のあるところであり、（五九頁）……絨氈工場の沒落で、世界が長い期間、戰爭や絨氈役場のミイラから解放されたことは悦しいことである」（六〇頁）と結んでいる。自然的唯物論にきわめて近いものをもつている。

Elisabeth Langgässer: Märkische Argonautenfahrt. 412 S. 1950.

〔ラングゲッサーは一八九九年、南獨ライン地方に生まれ、„Die Kolonne", „Hass" 等の小説によつて、小説家としてかなり早くから知られていた。本書は彼女の最後の大作。これを書き終えるとおきに亡つた。彼女の長女がナチスに捕えられ、アウシュヰッツの收容所に投獄されたことを附記する。〕

『巡禮行』この題名は、ギリシヤの勇者ヤソンが同志とともに、方船アルゴに乘り組み黑海のコルヒスを目指して、龍神に守られている金の寶を奪いに行き、神明の加護によつて目的を達して歸えるというギリシヤ神話から得ている。作品で一主要人物はこう言う

「平和の島、健全な秩序、黄金の寶の家、これが方船アルゴの目指すものなんです。」

構造と內容。今次の戰爭によつて受けた創痍を癒やすために、七人の男女が、期せずして、Anastasiendorf の修道院、（卽ち復活の修道院の意）へ向つて行脚の旅に上る途中で遭遇し、彼らの遭遇によつて出來た新たな事態と、途中での二三の出來事とにより、彼ら

は次第に魂の汚れを捨て、また神の遣わし給うた二人の修道尼の導きによつて、ついに修道院に達し心の平和を得るというカソリック的信仰の濃厚な作品である。

七人の男女の出發點（戰禍を受けた大都市）と、終點（修道院）の途中には小菜園の續く郊外、湖水、森、草原、村落もあるが、地名をもたない。それら自然の形象は抽象的な符號であり、七人の男女も、充分個性的に描かれながら普遍性をもつ戰爭被害者たちである。彼らは彼ら自身の遭遇によつて孤獨から救われ——、或るものは荒々しい、或るものは優しい、或るものは假面をかぶつた、さまざまの會話を交えるが、それらは絶叫なり、呟きなりであつて、彼らの內省の發露であつた——それらの多く思索的な會話の中に、踏み躪られた魂の立ち直おりが、彼らの自覺しない間に行われていることが、示され、またすべての事物に觸れて繰りひろげられる作者の聯想は、作者の信仰や情緒を纏綿と綴つている。それ故に、修辭的な形容の章句が非常に多く、それらは多く思辨的なものであるが、體驗の溫みに裏打ちされており、情緒に富み、救われている。（彼女の作品を高く評價する批評家が多い所以である。）

本書は筋の小說ではなくて、神の攝理による魂の狀態變化を跡づけること、それによつて信仰を開示することに主眼をおく小說である。卽ち魂の內部で行われる攝理を明かにしようとする。

二つの挿話が取り入れられる。これらの挿話は、大變に美しいものであり、全篇に對して光彩を與えている。私見によればこの小說の價値を倍加している。二篇ともに戰爭の災いを激しく負わされた子供たちの生活樣態が描寫され、思辨や倫理的教說がここでは全く後退し、作者の豐かな語り手としての能力を見せる快いものである。

この小說は、カーザックの『流れの背後の町』とは思想的には對蹠的な立場を示す。例えば『町』では子供の滯在が許されず、子供は町を素通りし直ちに永遠の暗に葬られる、町は大人の場所である。こうして暗へ送られる子供の數は近時增大し行くという、反カソリック的な、そして一滴の感傷をも許さない世界であるが、この『巡禮行』にあつては、神の攝理によつて救われる大人の魂の世界の縮圖として、子供の自然な遊びの世界を開いて見せる。

七人の男女は次のような人たちである。（一）怯惰のために愛する從妹を亡くした建築技師、肉體も精神も廢殘の狀態にあり、自己

の魂の建て直ほしにより、初めて美しい設計も可能と思いいたつている。（二）前者の妹、未歸還の作曲家の妻、夫を慕い待ち、絶望に瀕している成熟した美しい婦人。（三）東ドイツの捕虜收容所から歸つた若い兵隊。虚無の淵に沈んでいる。その名前も「最後平和」(Friedrich Am Ende)。ラングゲッサーは、廢墟の地下室の中で、夜獨り踞まつているこの男をこう描く。「夢を見ているのであろうか、彼は自己の位置をくずすまいとつとめていた、そして穢れた兩掌の中の水晶の玉をおがむようにもみながら、佛陀の巨大な姿を見ようとあせつていた、(三一頁ー二頁）……するとまた水滴が天井から石の平床へ落ちて來た。その音は、彼の絶對的靜寂の狀態に較べれば、凄じい音響であつた。あたかも、一人の體が非常な高みから水面へ平らに落下して來て粉々に飛び散るほどの凄じさであつた……それは、いかなる大砲も引き裂くことのできないような靜寂を引き裂き、その虚無を流した……。(三五頁)

（四）貴族の娘に生まれ、反ナチスの抵抗團體に入り、集中收容所に投獄され、暴行され、酒保の酌婦にされ、もろく傷き易い魂を厚い假面と憎惡で必死に守る端麗な少女。（五）水のない風景、枯れた心情のために、新たな鄕土を求める若い俳優。（六・七）カソリックに改宗しているユダヤ人夫妻。幼年期からの互の純愛に結ばれ、ナチスによつて投獄され、子供らを悉く獄中に亡くした。その怖しい體驗は牢獄のように彼らを壓している。

彼ら七人の行脚は、或は結ばれ、或は離れ攝理によつて進んで行つた。技師と貴族の少女、俳優と作曲家の妻が近寄り、二た組ともに肉體の接觸を遂げるにいたる。ラングゲッサーはそれらによつて、戰後の新しい戀愛の型態を打ち出そうとしている。「肉を慾する」という自虐的な暴露の中に、互のおかれている救いのない狀態、支えの要る狀態が理解され、相手に對する憐れみと愛とが湧く、としている。そればかりでなく「快樂」(Freude) という事實は、惡魔に根源をもちながら精靈によつて繰作され、攝理を現わす楔となつている。快樂の反對は「憂愁」である。

「憂愁」(Schwermut)。憂愁は地獄から發する、それは悔恨でもなく、悲しみでもなく苦痛でもない、それは惡魔の怖るべき絶望の根源である。希望も悔恨もないこの憂愁、顔も名ももたないこの虚無によつて全ヨーロッパは浸透されてしまつた。憂愁は、戰爭が殘して行つた大きな傷口から毒血のように湧き出し續けている。誰がそれを閉じ、灼ける鐵鏝でその場所を塞ぐことができよう……「快

樂」……花嫁のように誰でも手で觸れ、把むことのできる「快樂」の他にそれを癒やすものはあり得ない。かの憂愁が個人を超えた全體的なものであるのに對して、「快樂」はこよなく個人のものであり、特殊のものである……それは最も高く堅固な現實であり眞理自體、現實自體であり、創造の眞相、三位一體の內的構造である」(一二一—二頁)

『巡禮行』は史的現實としての廢墟と、身心の荒廢を豫定された出發點とし、攝理によつてついに魂の平和にいたると說く。

現實の再批判

カーザックの『町』は雄大な自然法則の支配する場でありとし、ラングゲッサーはヨーロッパの破壞と虛脫の狀態を人間に與えられた出發點なりとし、深く高い現實としての「快樂」を通じて心の平和に到る、悉くが神の攝理であるとする。

右の二つの根本的に對立する信條は、しかし、現實に對する共通な態度をもつている。卽ち、史的現實を兩者ともに自然的な所與として受け取ることである。ただ、一方はこれを集約的な不可避な運命とし、他方はこれを、しかし窮極に於いては一者に綜合される導かれたる個々の運命と見るという差があるのみである。

次に檢討されるゲルト・ガイザーの二つの作品は、現實を、われの精神において把えられた狀態であり、われの行爲を可能にさせ、われの根源を汲みとるべき場であると見る。現實は一切の偏見から解放されて、われによつて改めて把えられるべきであり、その現實の把握が、新しいわれの發祥を約束して與れる、と見るのである。

Gerd Gaiser: Eine Stimme hebt an. 452 S. 1950.

〔一九〇八年南獨ヴュルテンベルグ地方、エンツ盆地の一牧師の子として生まれ、畫家を志してスツットガルト、ケーニヒスベルグの美術學校に學び、イタリー、フランス、オランダその他の諸國を遍歷した。しかし、彼の鄕土の風物は彼に染み込んでいて、彼を絕えずそこへ引き戻す。畫の傍ら早くから詩や短篇を書いたが、いまでは、文章の道に乘り移つている。前出のゲースは、ガイ

ザーの處女作（後述）を讀んで、讃嘆し、將來を期待したが、第二作、表記の『聲は擧れり』はベルリン市文學賞（フォンテーヌ賞とも呼ばれる）を得、多くの評家の好評を得た。」

ゲッチンゲン大學新聞の『聲は擧れり』に對する批評は適切である。「この小說は文章の方向から評價さるべきである。凝縮されたごまかしのない韻律をもつ深い根源から發した文章であり、それは美文調の圓滑な曖昧な平板性をいささかもつていない、それでいて乾いた犬儒派的なところがない。……それは今日のわれわれの文學活動に類を見ないところであり、われわれはこれに對して報いるものがなくてはならない。云々」

彼の文章に顯著な性格は、傳統的な文章に對する烈しい反抗にある。前述したハルトラウブ、カーザック、ラングゲッサーは超現實派の作家と呼ばれるが、彼らは古典的な文體に反抗しはしない。ガイザーにあつては徹底した反抗であり、傳統に對して果敢な自己主張を叩きつける。それは文體だけの問題ではなく、物の見方、感じ方の主張である。彼は事物・人間を自己の意識において把む。自分を繞る世界を、視覺や嗅覺に訴えるところの感覺的現象として把えようとする。人間內部に行われる決斷とか自己成長とか、或は自覺されない愛情とか、一切の實存的活動を、ウィーヒェルトやラングゲッサーに時に見られるような觀念的な仕方で說明するのではなく、現象された現實の會話や些細な行動・身振りの中に、それを感じ取ろうとし、烈しく、その微妙な氣配の內部へ挑みかかる。彼の文章は、「現象派」と呼ばれてもよいであろう。

この彼の眞への衝迫が、彼の珍しくそして新しい文章を生むだ母胎であると同時に、その故に、彼の文章を反抗のための反抗というみじめな方向へは容易に連れて行かないのである。彼は手紙の中で言う

「この態度（彼の文學に對する態度）は、同時代のドイツ人の……いやドイツ人だけではなく、襲つて來る事象からけつして避退せず、つねに行動し、苦惱し、さまざまに裏切られ、また自己をさえ裏切り懷疑し、しかも虛無には墮することのない、そして自己の體驗し、視たことに向つてわが歌をうたう——そのような人間の態度である」（註一五）

彼にとつては體驗し、覩たことに指向することが主要であつて、新奇そのものは目的でない。この小説に現われる人物は無口、多辯の別はあつても、悉くがそれぞれの癖のある意見や性情の、粗野な、荒々しい、そして簡潔な發表者である。それらの荒さの内部に蠢く纖細な慄動を傳えるガイザーは名手である。ほんの一例を擧げる

„Der Ball sprang die Mauer an mit süssem Klopfen, das leichte süsse Springen des Kinderballs,“

(壁に當つて跳ねるゴムマリの跳躍が適確に傳えられている)

また彼は言う「私は、事物を言わば圖象として見る」(註一六) 畫家としての特質が現われるのである。彼の處女作『中間地帶』に既にそれが顯著である。

„Jetzt war die Sonne verschwunden, der Himmel glashell; nur weit draussen, wo die Wasserfluten auf ihrer Höhe noch Licht fingen, leuchtete es bernsteinbraun, und darüber schaukelte goldrostig unser Schiffsrauch, den der Wind entführte.“

(八六頁)

烈しい筆致をもつ繪である。

内容。この『聲は擧れり』も筋を追う小説ではない。主人公オーベルステレーンには、妻も家もあつたが、表面上彼の側にはない責のために、自分の妻の許へは歸れないで、戰爭から無一物になつて、昔、彼が子供のころに住んだことのあるシュワーベンの森の盆地へ、當もなく、直接やつて來た。丁度一九四五年、終戰の直後のことである。村を見下す丘の上に蹴球場があり、二人の職のない青年が地馴しをしていた、彼も別にすることもない、そこで手傳いをする。これがこの土地へ來て最初の彼の行動。それから翌年四月に、妻からの言傳があり、妻の許へ歸つて行くまでの間の彼の行動が描かれている。

この小説は、主人公の半年餘りの、森の村の生活を、そこで彼が結んだ人間關係の網の目を通して緻密に跡ずけたものである。

村には杏や牛乳や野菜の作物があり、町から連日買出部隊がやつて來た。政府の難民救濟事業の森林伐採もその周邊で行われていた。

彼の生活に關聯をもつた女たち。彼女らは、戰爭が殘した、支えのない、多かれ少なかれ男性化した女たちだ。子供を抱えた未歸還者の妻たち、監獄にまだ繫がれている父親を待つその娘。彼に部屋を貸している女。昔馴染の女友達。都會風な蓮葉な女。みな孤獨であり、それぞれ違つた風に救いや支えを求めて彼の方に手を差しのべていた。あるものは意識しあるものは意識しないで。

彼から貰つた一箱のマッチを肌身から離さず、それを灯すことに異常な悦をもちながら、彼に愛の告白はできない野性の少女。オーベルステレーンは、少女の家に引いてある筧の水源を、深夜、止めて、獨り山の一軒家に棲む少女に怖しいまでに彼の存在を意識させる。(何のために彼はそんなことをするのか？　彼も答に窮するだろう。しかし思うに、彼女の寂莫を深く知る人間が外にいることを知らせてやりたかつたのではないか)

都會風な女。自動車で來たり、乞食のようになつて悄然と歸つて來たりする女、彼に強い好意を示し、盆地の村の外へ連れ出そうと空しく誘惑している。

彼が汗して刻んだ自分の薪木の山を、未歸還者の人妻にみな與えてしまう。二人は出來でいると噂を立てられながら、別にそうでもない。彼女に同情している譯でもなかつた、それはもつと別な根から出ている感情である。彼は戀愛や感謝を當てにしてはいない。

彼の幼馴染の女。彼「あいつ（彼の妻）は獨ぼつちなんだ、俺だつてそうだ。あの頃は互に力になり合うつてことができなかつた。こんどこそ俺は試してみるよ」(四四九頁)彼女（病氣で臥ている）「あんたたち男はいいよ、そうやつて部屋の中をあちこち歩いていれるんだから。その譯知つてる？」彼「知らない」彼女「女にはね、あんたみたいに兩手をしまいこんでおけるヅボンがないからなのよ」(彼女は以前に彼を想つていたのだ)

彼を繞る男仲間。彼を繞る男や女と彼自身との間には、名づけようのない共感があつた。醫者。オーベルステレーンは流行性腦炎に似た病氣となつて彼に見て貰つていた。醫者は外國の新藥を手に入れて、この流行病を防ぎ、オーベルステレーンを治療しようとしていた。その貴重藥を狙つて、醫者と、藥局の主人と店員、女（皆オーベルステレーンの友人）の夜カルタ遊びをしている所へ盜賊團が

押し込んで來る。四人は頑として藥を出さない。賊は拳銃を擬して、後へ引かない。そこで藥局の店員（片眼の男でオーベルステレーンの親友だ）は、賊に藥を引渡すと欺き、進んで賊に連れられて行き、射殺されてしまう……

女の友もそうであり、都會風の女は彼を絶えず誘惑しようと試みながら、最後には、彼の妻を訪ね、（妻と闇商賣などを共同でやつたりするが）、彼の妻も、彼と同じように苦しみ、彼の歸るのを待ちあぐんでいる、けれどもただ彼の許しを待つているというようなそんな氣分ではいない、彼女だつて苦しいんだ、早く妻の許へ歸るようにと妻の言葉を傳えるとともに忠告を與えて去つて行つて了う。

大ぜいの子供も出て來る。未歸還者の美しい人妻の子供を彼は庇護し、村の頑童たちの惡戯から守る。そしてこれを懲らすがその大人げなさの反省は彼に來ない、彼に追われて斷崖から落ち大怪我をした惡童を、その屋根裏の家まで見屆けに行く。

この小說は、以上のような人々の日常行爲を、晩夏から翌年の春にかけての自然のただずまいの變化に注意しながら、人間行爲の陰影と組み合せながら、描いて行く。伐採事業の中絶される早春あたりが彼のもつとも苦しい危機であつた。

この小說を、或る書評は、「宗教的」な小說と評した。それは一つの見方として可能であろう、私見によれば、オーベルステレーンの破滅を支えていたのは、人々が、彼の落ちこむ奈落の上に張り繞らしていて呉れた、そして彼もまた、ことに多くの女性に張つて落ちるのを待ちかまえていてやつた蜘蛛の糸のように細い網の目であろう。形式的に名づければ交流とも呼べるであろう、その眞の姿を名ずけられない深さで湛えているように見える。これは單純に愛などと呼ぶことは誤りである。作者の意圖を傷けるであろう。

そしてオーベルステレーンは人々に別れを告げて妻の許へ去づて行く

「誰もが、汽車に乘つて旅に出て行く時、電線が隨いて來る、それであつた。電線は上がり、下がり、また上り、そして沈み、互に切れ合い、交錯し、一本、また一本と急に別れ、無くなり、少時、空虛がそのあとに續く。」（四五〇頁）

彼の處女作『中間地帶』（„Zwischenland“ 159 S. 1949.）は七つの短篇を集めたもので、戰後に取材されたものが大半である。文章は、『聲』ほど一貫していないが、先きに例として揭げたように殆んど第二作の彼の特質が明瞭に看取できる。しかし客觀的表現もあ

り、主觀的表現もあり、いろいろである。„Die Rache der Rose May“「ローゼ・マイの復讐」や „Schwesterlegende“「看護婦譚」など好個の短篇と目される。

ガイザーの文學は、人間行爲や心理の深奥部を現象的方法によつて把えんとする努力であり、その眞への追求は、科學的態度に極めて近いと思われる。彼は、人間の狀態を、現象に限界づけていながら、識域の外にまで迫つて實存活動の眞を衝こうとする。彼の文學を實存主義的傾向のそれと評するのは不當でないと思われる。彼の他にこの派に屬すると言われる作家（例えば Hermann Lenz）の作品が入手できず檢討するにいたらなかつたのは遺憾である。

實存主義を越えて

さて西ドイツには、實存主義から脱しようという傾向も近時次第に現われていることを前に指摘したが、私見によれば、Ernst Jünger も、その代表者の有力な一人と目される。（ただし、この斷定は、或る程度の保留を付せなければならないであろう、私は彼の左記以外の諸作を檢討する機會をまだもたないから）

Ernst Jünger: Der Waldgang. 143 S. 1951.

〔この、戰爭中ドイツ以外の國で却つて有名となつた抵抗の文學者は今年五十八歳、ハイデルベルクで生まれ、ハノヴァーで育つた。高等學校の最上級の時兩親の家を飛び出し、アフリカへ行き外人部隊に入つたが親許へ連れ戻され、いくばくもなく第一次大戰が起り、志願兵としてハノヴァー聯隊に入隊した。七回（十四回と言う人もある）負傷し、最高勳章 Pour le mérite を授かつた。或る評者は、しかし、彼が所謂歴戰の勇士型の人物ではなく、徹頭徹尾文化人であり、戰鬪に脅かされ戰鬪したにすぎないと言うが、(註一七) いずれにせよ、勇敢に戰つたに相違ない。戰爭の體驗を日記に殘した。一九二三年までドイツ國防軍に勤務してい

たが、それ以後は自由な文學者として立つ。今次の大戰にも出征して西部戰線に配屬されたが、パリにいて抵抗派の秘密團體と氣脈を通じていたと言われ、一九四四年、終戰一年まえに防衛不適格者と見做され、軍から追放された〕

構造と內容。『森林行』は森の內を行くべき人の道を教え、森の內の小徑の數々を示す。ユンガーはこの百五十頁に足りない小さな作品によつて、現代に課されている「自由の防衛」という課題を、抽象的な議論から離れて極めて具體的に開示した。それは、作者の強い文學的形式への意圖に貫かれた作品であり、言葉の背後に、事物や狀態の姿が具象的に傳えられている。作者は、人間存在の中核をなしている自由の活動という事態を、解明しようとするのではなく、自らの信ずるところを他に傳達し、訴える。彼は廣く視野を世界の政情に向け、その世界に在るドイツ人にことに強く話しかける、その意味でこの書は必ずしもドイツ人のためのみのものでなく、廣く世界人のための書でもある。彼は、壓制者を個人の自由—決斷—抵抗によつて克服すべきことを唱へ、抑壓せられる者を勇氣ずける。

本書は三十四節から成り、最後に結びの一節を添えている。形は斷章であるが、明かに首尾の一貫性をもつもので、決してアフォリスメンの單なる羅列ではない。彼はまず、民主主義世界に共通に實施されている、選擧という政治上の制度の缺陷と欺瞞とを衝き、讀者の乘つている社會を搖さぶる。「選擧は人民を抑える萬力の齒」であり、われわれは「競技規則を守らない相手（壓制者）」と競技していることを實感させる。投票場に出頭するよりは、彼によれば、人の通る橋の手摺などに、「私は否と投票した」と落書した方が遙かに自己の意志を表明したことになる。いや「否」とさえいうこともいらない、Wでよい。何故ならば、Wは、「われら」、「監視」、「群狼」、「抵抗」、「森の歩行者」の頭字だからだという。

彼が群狼と呼び森の歩行者と呼ぶ者は何であるか？　彼によれば、現代人の大きな類型は三つある、「勞働者」「兵隊」「森の歩行者」これである。「勞働者は作業の原理であり、宇宙を新しき樣式によつて浸透し支配せんとする。兵隊は作業の影の犧牲者であり、廣大な火焰の沙漠で重荷を擔う。彼は善良なる、睦み合う精神であり、たんに民族の內部においてのみでなく、諸民族間のちぎりとなる。

――さてわれわれの呼ぶ『森の歩行者』とは、偉大なる進化過程によつて個立化され、故郷を喪い、破滅の前に立たされていることを知る人間を意味する。しかしそれでは萬人の運命であろう、即ちさらに一つの規定がつけ加えられねばならない。『森の歩行者』は抵抗することに決意し、見込みのない闘爭を敢行する人間を意味する。」(四一頁)

ユンガーによれば、現代の世界は卑小な人間が、巨大な機械力を掌握する腹立しき世の中であり、第一次大戰と第二大戰の差は、後者にあつては、その巨大な破壞力の前に、一切の英雄主義が意味をもたなくなつたことである。ユンガーは「森」という人間の尊嚴や自由を可能にしている領域に棲み、そのような社會の形相に對して抵抗せよというのであり、政治的環境への反抗をまず土臺とし、そこから個人や文化の自由の擁護を考える。

現代を覆う「恐怖」の分析。それは究極において主觀的には個人死に對する怖れに還元されるものであり、森はそのような怖れに避退するものをかき抱き、勇氣ずける、しかし、「恐怖」は客觀的實在としては、時代の假面や型をつけて人を取り卷く、その假面をはぐがよい、卑小なるものをわが胸の中に超克せよ、ソクラテスの死！

「史的世界(即ち現實)は譬えれば、速やかに進む船であり、その運動に眼を奪われて、われら船客は、この船が純粹な靜寂境に停つていることを知らない。」(五三―四頁) この靜寂境が港であり故郷であり、つまり「森」である。それ故彼によれば「ソ聯人も船客であり、同樣に皆怖れに脅えている、しかし彼はロシヤ人として森の中に棲む、それ故ソ聯人にとつても「森林行」は中核的問題なのだ」(六三頁)

史的必然の進行と、自由の要求とを、ユンガーは、「正道(Rechtsweg)」という象徵的な言葉で結んだ。彼によれば自由は、必然的要求と結ばれて初めて希求され、必要のないところに自由は望まれ得ない。しかしこの正道という考えは協調の精神を示すものではない、それは誰にとつても正しいと信じられる道であり、信念である。そして彼は、民族國家から地球國家への進化を提唱し、各國主權の放棄は多くの美果を齎すであろうという。

「森の歩行者」の標語は、「いま、ここ」であり、騎士道を知らぬ、邪惡と科學の融合した敵に向つて、即座に具體的な抵抗をなすこ

とを誓うものである。彼は、武器をもたず、壓倒的軍備を有する敵に、露わにまた隱密に、素手で抵抗する。彼は犯罪的な行爲に據らないし、兵法も知らない、ただ彼は實存的に自由なだけである。

ユンガーのこの、抵抗への鼓舞の書は、明かに實存哲學の思想圈から發している。けれども、すでに思辨的な、ことに辨證法的理論の枠を拔け出して、極めて實際的な、いま、ここに要求される行動をとれと提唱する。その要請される行動は、現代を覆う政治的狀況に對する抵抗から發する。彼に提唱されること自體、は必ずしも目新しいものでない、しかし實存哲學の基盤から出て、具體的行動を名指して提唱する勇敢さが新しいのであり、一つの新傾向を指示している。彼の唱道するところは簡潔で强壯である。難解ではないが、讀み易いとは言えない重厚なこうした書物がドイツで廣く讀まれるのも羨しいことに感じられる。

後記

枚數の關係から、宗教的傾向をもつ作家の作品については詳しく觸れ得ない。左に簡單にその大樣を述べる。

Edzard Schaper: Der grosse offenbare Tag. 106 S. 1949.『偉大なる啓示の日』フインランドと接しているソ聯の國境地帶に住んでいたキリスト教徒の一部落に起つた奇蹟の物語。ボルシェヴィキの青年を入れたままその部落の教會堂が春先の流氷に押し流されて、大湖に漂つていた。信仰の厚い老爺が舟を漕ぎ出し、奇蹟によつて、溺れかかつている青年を救う。この物語りの大半が、北歐の果ての春の雪解時の、河川の、湖水の、異樣な轟きを立てて割れ、ぶつかり合いながら流れ、あるいは漂つている有樣の素晴しい驚ろくばかり精密な寫實的描寫で滿たされている。次に觸れるベルゲングリューンも、このシャーパーも、評家にもよく言われるように、物語作者として、卓絶した手腕をもつことは否む餘地がない。二人ともに、獨・ソ兩國の接境地帶に育つた人たちであり、宗教的（シャーパーは新教、ベルゲングリューンは舊教）世界觀によつて彼らの作品は浸透されている。

Schaper: Die Freiheit des Gefangenen. 285 S. 1950.『虜囚の自由』は素材をナポレオン時代にとる。ナポレオン皇帝の麾下の一

佛人將校が、皇帝の政敵アンジョー候夫人を戀してその邸に出入したため、謀叛の謙疑で投獄される、夫人はこれを憐んで脱獄の道具を私かに差し入れるが、脱獄を肯じないで、正當の裁判を要求する。夫人はついに獄舍に現われ、愛をさえ暗に與えて救出しようとするが、脱獄を拒む、最後に牧師に神の道を示され、法廷に立ち、軍務に怠慢の廉で將校の位階を剝奪されて放免され、僧院に入る。本書はあまり好評ではなかつた。(註一八)

Werner Bergengruen: Feuerzeichen. 260 S. 1949. 『篝火』は東北ドイツ海岸の海水浴旅館の主人に降りかかつた不幸な運命の物語。今世紀に入つた初頭のころで、まだ開けない半農の海水浴場。主人公ハーンは、クライストの Kohlhaas に似た人物。暴風雨の夜、舟遊びに出て遭難した浴客たちに目標を與えるために、海岸の沙丘に大きな篝火を焚き、徹宵の作業で全員を救助した。夏も過ぎ客は歸つて了つた秋のころ、突然ハーンに町の裁判所から召喚狀が來る。海岸で焚いた篝火がその地方に行はれていた法律に違背しその責を問われる。彼は自己の良心の命令と客觀的な法律との矛盾に當面させられたが、彼の剛直な良心が、法の權威を最後まで認めることができず、人間に良心の形で與えられている罪深さのために次第に深く救いがたい暗黑に陷ち入り、ついに自殺して果てる心理の經過を描いている。これも寫實的な小說である。ベルゲングリューンは好んで良心と人間の責罪の結びつきを衝く小說を書く。彼の „Feuerprobe“『火の證』もそうしたテーマの短篇小說である。

—一九五二年十月二日記—

註一 Neue Literarische Welt: Nr. 3. S. 16.

この文學新聞に掲げられた記事によると、東獨最大の劇作家 Bert Brecht の „Das Verhör des Lukullus“ は東獨で上演禁止となり、當局からの命令で訂正させられた、西獨ではその訂正前のものを南獨のフランクフルト市などで上演された。そして好評であつたという。

註二 Das Ganze Deutschland; 1. Dez. 1951. „Jugend im Flüchtlingslager.“ u. 15. Dez. 1951. „Der verweigerte Interzonen-

pass." etc.

註三　例えば、Albrecht Goes はマンの思想に曾て影響され、ヘッセの作品を深く愛すると手紙その他の中で言つている。

註四　Neue Literarische. Welt. Nr. 12. 25. Juni 1952.

註五　K. Jaspers: Philosophie 3. Bd. (Metaphysik). S. 192 ff.

ヤスパースによれば、藝術活動とは、超絶した實在の謎文字を讀解する瞑想的な沈潛、卽ち神秘的な瞑想と——他方現實的な生存の營みとの中間地域であり、この活動は、實存を讀解し、存在の可能性を獲るがためには缺くべからざる活動であるとする。この活動によつて人間はその想像を充足され、至樂の狀態を得る。しかして文學はかかる活動の一つの現われである。

註六　K. Jaspers: Psychologie der Weltanschauung. S. 486.

註七　Das Ganze Deutschland. 17. Mai 1951.

註八　Ernst Wiechert: Jahre und Zeiten. S. 254.

註九　Karl Jaspers: Über das Tragische. S. 7.

ヤスパースの言う、『文學とは、われわれがそれによつて、世界全域を、そしてわれわれの本質の一切の內實をば、もつとも自然的なそしてもつとも自明的な仕方で、つかみかかるところの思考原理(オルガノン)である。』という意味が、本稿で言われている『無心』の活動である。

註一〇　Karl August Kutzbach: Autorenlexikon der Gegenwart. 1950. S. 176 ff.

註一一　ibid.

註一二　Merkur. Nr. 46. Dez. 1951.

註一三　Das Ganze Deutschland. 24. Mai 1952, „Nur Zuckmayer verdient genug"

註一四　Johannes Pfeiffer: Wege zur Dichtung. 1952. S. 44 ff. S. 51 ff.

註一五　Gerd Gaiser : Brief.（ガイザーから筆者に宛られた私信）

註一六　ibid.

註一七　Hans-Rudolf Müller-Schwefe : Ernst Jünger. 1951.

註一八　Merkur. Nr. 47. 1. Heft 1952.